中世真名本に於ける「而」字の用法と訓とについて

――妙本寺本『曽我物語』を中心として――

橋村勝明

目次

一、はじめに
二、曽我物語に於ける「而」字
三、中世以前の「而程」「而事」について
四、日蓮宗に於ける「而」の用法
　1．日興門流からの検討
　2．日助・日我と同時代の日蓮宗内異法脈からの検討
五、おわりに

一、はじめに

「而」字は、中世の古辞書に於いてシカ系の接続詞との結びつきがみられる漢字である。(1) 然るに妙本寺本『曽我物語』には、「而」字を以てサ系の接続詞、あるいはその派生語として使用した用例が複数例見出せる。そこで本稿では、妙本寺本『曽我物語』に於ける「而」字の訓読法を確認した上で、真名本を初めとする周辺の資料をも対象として、「而」字

とその訓との関係と、用字法とについて検討する。右の検討の結果、種々の資料の内、「而」字とサ系の語との結びつきが見出せる資料は真名本であり、その中でも限られた資料に於いてであることを指摘する。

二、妙本寺本『曽我物語』に於ける「而」字

まず、中世真名本[2]の一つ、妙本寺本『曽我物語』をとりあげ、その用字と訓とについて検討する。妙本寺本『曽我物語』中の「而」字を、次に記す如くまず単字と熟字とに分かち、更に単字を全訓付訓・部分付訓・無訓とに分類した。以下、その分類結果の表[3]を掲げる。

- 単字
  - 全訓付訓
  - 部分付訓
  - 無訓
- 熟字

単字	全訓付訓	サリとも	1
		サラは	1
		サレはとて	1
	部分付訓	―は	78
		―ラは	6
		―レは	4
		―はとて	5
		―はこそ	1
		―はコソと	1
		―はに(耶)	1
		―とも	21

	―レとも	1
	―リとも	2
	―かも	1
	―モ	1
	―てコソ	1
	―て	1
	―ル	2
	―に	1
無訓		6
熟字	而程	8
	而事	5
	而御事	1
	不而	12
	而気	1
	乍而	1

全訓付訓の用例は表中網掛けを施した全3例で、その訓として「サリトモ」「サラハ」「サレハトテ」と、いずれも「而」字にサ系接続詞の訓を与えている。全訓付訓例3例を次に掲げる。

夜深（ケレハサリトモト ケレトモ）而　思（シテ）、罷出（ツル）処（ニハ）随兵成レ垣　（四21オ）

哀己程（ノ）果報拙（キケリ）无レ者（ハ）、而（サラハ）今一月（モテ）疾生　（二9オ）

矢（ニヲ）一物（ヌハ）不レ云有レ事（カハ）、而（サレハトテ）亦無二大事（ノニテハ）一物乎　（二2オ）

また、熟字の用例においても、その熟字の構成からサ系接続詞或いはそれに類する語として使用されている用例が見られる。次の熟字「不而」はその付訓を手掛かりにすると「サラヌダニ」と訓める。

只独尋（ケルコソ）　参珍重（ケレ）、不（タニラ）レ而枯二人目草（ハモモ）一　（一5ウ）

また、次の用例「乍而」は「サリナガラモ」と訓読するものと考える。

有(テ)親方甲斐(ノ)制(ス)加様(ニ)乍(モリテ)而(メ)為(ス)堅呼返(ツ)小次郎(ヲ)　（五7ウ）

このように、「而」字をサ系接続詞或いはそれに類する語として訓読することが認められるならば、熟字「而気」は、「サリゲ」となり、次の用例

然(ともキ)无(シテ)而気(ニツ、ツ、のかりてとそにける)様賞　空咲　起直　袴恬懸(シテ)　戸云、　（七2ウ）

の「无而気」は「サリゲナキ」と訓読できるのである。これらの用例から、少なくとも付訓の存する「而」字については用字法から推してサ系語と密接に関わっているものと理解できる。

『曽我物語』よりも時代的に遡る資料であるが、「而」字は観智院本『類聚名義抄』の記述に見える如く、シカ系の接続詞として訓読することが知られている。

而　加之(ヤ)反　シカモ(シテ)　ノコル　コトシ　シカク　ナムタチ　シテ　禾(レ)ニ　（佛上75・4）

白河本『字鏡集』(4)に於いても「ノコル　コトシ　シカク　ナムタチ　シカモ　スナハチ　ツラノチ　ヨシ　ヨル」の各訓を有するのみで、右と同様である。

また、『節用集』の記述によっても「而」字はシカ系の語としてその訓が記されている。『節用集』諸本の内、シカ系・サ系の語について記述が見られた用例は左に掲げる通りである。

永禄二年本
而(シカモ)　（213／3）

饅頭屋本
然(シカル)而(シカモ)　（159／6）

堯空本		易林本	
而（シカモ）	（196／3）	而（シカモ）然（同）	（219／5）

院政期から中世室町時代の字訓を帰納するには、右の用例の貧なることは否めないが、辞書の記述に従うならば、妙本寺本『曽我物語』において「而」字の訓としてサ系接続詞を用いることは特異な位置にあるといえよう。

但し、室町時代末の文献で、「而」字にサ系接続詞との関係を指摘できる辞書として、妙本寺蔵『いろは字』（永禄二年（一五五九）成立）が挙げられる。サ系・シカ系接続詞に関する記述全てを次に記す。

妙本寺蔵『いろは字』[5]

而　サレハ
尓（サテ）　サレハ　（60・3）
和ヨミ　事（サル）

然者（サラバ）
サレハ　（60・7）
トモ　和語　尓

然（シカルニ）　而
尓　（87・1）

「尓」字に「而」を類義字として掲出し、サ系接続詞である「サレバ」訓を掲げる。「然」字については、「然者」を「サレバ・サラバ・サレトモ」として「然」字とサ系接続詞との関係を伺わせ、「然」字に対しては「シカルニ」とシカ系接続詞との対応も見せている。[6]

『いろは字』と『曽我物語』とは、両本ともに妙本寺に蔵され、曽我物語が妙本寺僧日我の什物であること、また『い

ろは字』が同じ日我の著作であることを勘案すると、両本の資料的な位置関係は非常に近いのである。

三、中世以前の「而程」「而事」について

ここまで字訓の検討をしてきたが、妙本寺本『曽我物語』にはサ系接続詞を背景に持つであろう熟字が存した。それらの用例についても検討する必要があろう。熟字の内、先に掲げた以外の用法は、サ系の接続関係を示す連語として「而程」「而事」、サ系接頭辞を含む連語の一部として「乍而」「不而」がみられる。

熟字用例

語ニ曽我殿ニ、而程安聞、此聞　（五6ウ）
母下人共尋レ実申ニ而事候一　（六30ウ）
只独尋　参珍重、不レ而枯ニ人目草一　（一5ウ）
親方甲斐ニ制ニ加様一乍レ而為レ堅、呼ニ返小次郎一　（五7ウ）

これらの熟字の内、「而事」「而程」と、他の二種（「乍而」「不而」）とを分かち、「而＋名詞」（「而事」「而程」）について考察する。

中世までの諸文献に於ける「而事」「而程」の出現状況を左に掲げる。調査対象[7]としては、変体漢文と称される資料を中心として、若干の漢字片仮名交り文についても取り上げた。表中、文書・古記録・真名本そして軍記・抄物である漢字片仮名交り文の順に記す。尚、（　）内の数字は、「然而程」「然而事」の用例数で、参考までに掲げた。又、備考を〔　〕内に記した。

古記録・文書では字の連続として、「而程」は見られるが、その用法は熟字として接続詞的に用いられているのではなく、「而」単字として用いられているのである。全2例を次に記す。

資料＼漢字	而程（然而程）	而事（然而事）
平安遺文	1	3（1）
貞信公記	0	0（1）
九暦	0	1
小右記	0（1）	3（10）
御堂関白記	0	1
殿暦	0	2
岡屋関白記	0	0
蔗軒日録	0	0
方丈記	0	0
神道集	2	12
曽我物語	8	5
大塔物語	〔去程ノミ〕	0
四部合戦状本平家物語	8	7
源平闘諍録	0	0
延慶本平家物語	〔猿程ノミ10例〕	〔猿事ノミ43例〕
応仁記	〔去程ノミ〕	0
湯山聯句抄	〔去程ノミ2例〕	0

此□潛禅師被下別給清文取給、又鶴子下別給、而程遙堺、隔土毛闕□耳、為恥不少垂還迹者宜哉以状

（平安遺文一九〇伊州某書状、延喜四年十月二十二日）

事可同彼意、然而程在遼遠、仍猶可撰吉日也、此田等具相含了（小右記、長元元年七月十五日）

ここで用いられている「程」は「遙堺」[8]「遼遠」の程度を示す語「ホド」として用いられているのである。従って、これらの用例を除外するならば、管見の限りでは、古記録・文書に於いて「而程」は接続詞として使用されないということになる。一方、「而事」は、古記録にその用例を見ることが出来る。

そのような状況にあって、『神道集』・『曽我物語』・四部合戦状本『平家物語』では複数例存する。これらの真名本と同時代の文献と比較すると、他本が「去程」等の「去」字を用いているのに対し、真名本のなかでも特に『神道集』・『曽我物語』・四部合戦状本『平家物語』では「而程」「而事」を用いるという違いが指摘できる。

「而程」の用例（全例中2例を掲げる）[9]

云二禁香一者聞レ之且待云而程后千手経読 後御産色見（神道集59／5）

天人鬼畜至 妙 思 成 ケリ而程 有夜遊件鬼王寄合 伊諱門地野辺 遊ケリ（神道集150／11）

但し、次の用例も存する。

是程此君守護 事只事 非而 程三十里隔此山奥苑商山一処云二喜見上人一聖在（神道集60／10）

この用例は、「シカルニホド」の用例で、「程」が接続詞を構成する要素ではなく、名詞と理解できる。このような用例は用例数に計上していない。

真名本として『曽我物語』等の資料と比較の対象として取り上げられる『大塔物語』においては、「而」字に付訓が存しないのでサ系・シカ系の何れかを決し難い。しかし、サ系接続詞として「去程」「去間」の用例が見られることから、「而」字の訓としてはシカ系接続詞が妥当であろう。

四部合戦状本『平家物語』に於いては、用字として「而程」（8例）、「而事」（7例）がみられ、更に他本には見えない「不而」（4例）、「乍而」（2例）、「而気」（2例）が見られる。『神道集』・『曽我物語』・四部合戦状本『平家物語』の三本に「而程」「而事」が見られることについては、これらの資料の間に種々の共通性が指摘されており、[10]それらに加えて用

字・訓読の面でも共通性を指摘することが出来るのである。

『源平闘諍録』は、「而程」「而事」ともに用例がみられない。但し、「然程」（44例）「然事」（2例）がみられ、それらはそれぞれ「サルホド」「サルコト」と訓ずるものとみられる。「然」字には『源平闘諍録』に全訓付訓例としてサ系語が確認できる。(11)

さて、「サラヌダニ」等の訓を背景とする用字が生じた背景的要因としては、所謂和漢混淆文に於ける語「サルホド」の頻用が認められる。用字として既に存していた「而程」に対する訓として定着したのである。

「而程」は、『今昔物語集』に次の用例がみられる。

寧ニ此羅漢ヲ供養シテ昼夜ニ帰依スル事无限シ。而ル程ニ、婆羅門、要事有テ遠ク行カムト為ルニ（巻二、29）

この用例に関して岩波日本古典文学大系補注（301）では「この接続詞は、後の軍記物語においては「サル程ニ」となり、屢々使われること、周知の通り。（後略）」としている。(12)

確かに、覚一本『平家物語』においては、「サルホドニ」が100例出現するのに対して、「シカルホドニ」は存しない。今昔物語集において「而程」が「シカルホドニ」「サルホドニ」の何れかであることは直ちに知り得ないとして、そのような用字「而程」に相当する語としてシカ系が使用されず、サ系の語「サルホドニ」が頻用されるに至って、「而程」が「サルホドニ」と結びつき、「而」字に「サリナガラ」（「乍而」）「サラヌダニ」（「不而」）などのサ系接続詞としての用法が生じたとみられる。(13)「而事」にも同様の過程が想定されようが、その訓読について確例を見出していない。

四、日蓮宗に於ける「而」の用法

これまで、「而」字とサ系語との関連が見られる資料の内『曽我物語』・『いろは字』は、何れも日蓮宗と関わる資料である。本稿で中心的に取り上げた『曽我物語』が所蔵される妙本寺は、日蓮宗日興門流の日郷の開基にかかる寺である。

この妙本寺本の副本とされる本門寺本を所蔵する本門寺もまた日興門流であり、それら真名本を仮名に改めたとされる大石寺本を所蔵する大石寺もまた、同様である。次に血脈を掲げる。(14)

- 日蓮 ―― 日興
  - 日目
    - 日道 ―― 日蓮正宗総本山大石寺（大石寺本『曽我物語』）
    - 日郷 ―― 日蓮宗富士山久遠寺※久遠寺と妙本寺とは兼任
    - 日蓮正宗中谷山妙本寺（妙本寺本『曽我物語』・『いろは字』）
  - 日尊 ―― 日蓮宗本山要法寺
  - 日代 ―― 日蓮系単立富士山本門寺
  - 日妙 ―― 日蓮宗多宝富士山本門寺（本門寺本『曽我物語』）

妙本寺本にその名がみえる日我は、日郷からは十代後の妙本寺の住持である。これらのことから、「而」字がサ系語として使用されるのは日蓮宗内部に問題の所在が存すると考えられる。そこで、日蓮宗の資料に先に真名本において指摘した如き「而」字とサ系語との関係が見出せるのか否かについて検討する。妙本寺本『曽我物語』の日助・日我による「而」字の使用の根元を明らかにする手順として、

1．日興門流内部からの検討

2．日助・日我と同時代の日蓮宗内異法脈からの検討

の二つの視点を定めることとする。1は法脈内部での伝統的用字法の可能性、2は共時態としての日蓮宗の用字法の可能性の検討である。

資料としては、『日蓮宗宗学全書』より、先の1、2に該当する資料を選定した。

1．日興門流からの検討

日興門の資料として、『日蓮宗宗学全書』第二巻、興尊全集・興門集[15]をとりあげた。ただし、日興の著述に関しては、『日興上人全集』[16]を使用した。興門全集には日目、日華、日仙、日代、日道、日妙、日郷、日助、日尊、日順、日満、日印、日大、日叡、日伝、日盛、日眼の著述が存する。これらの内には、漢字文だけでなく仮名交じり文も存するが、一次的な調査として、表記には制限を設けなかった。以下、2についても同様である。

調査の結果、「而事」「而程」は両語ともにみられなかった[17]。

右の結果より、「而」字をサ系語として使用する、或いは「而程」「而事」を使用するということが、日興門流内の用字法或いは訓読法であるという可能性は極めて低い。

2．日助・日我と同時代の日蓮宗内異法脈からの検討

日助・日我と同時代の日蓮僧としては、『日蓮宗宗学全書』内に日辰、日修、日現、日洸、日樹の著述がみられる。それらの内、ここでは日辰（永正五～天正四（一五七六））の『造仏論議』『読唱論議[18]』を調査した結果、名詞に掛かる用例としては「而時」一例で、「事」「程」に掛かる用例は見られなかった。

以上二つの視点より調査した結果、「而事」「而程」を見出すことができなかった。このことから、曽我物語や神道集に見られる用字法は、日蓮宗宗派内部の種々の資料に渡る、特殊な用字法というわけではないと言えよう。

日蓮宗内部において共時態としても、門流においても特異な位置を占める曽我物語や神道集の「而」字の用字法は、時代・宗教的な流派による位相とは別の視点によって説明されなければならない。

五、おわりに

以上、『曽我物語』の「而」字は、付訓の存する用例は勿論、「而事」「而程」「不而」「乍而」「而気」についてもサ系

接続詞の語として訓読する、ということを指摘した。

何故先代では決して結びつくことの無かった、サ系の語と「而」字とが結びつき得たかということに関しては、熟字「而程」が「サルホドニ」の頻用に伴い、「而程」と「サルホドニ」とが結びついたことが一つの要因として考えられる。その後更に、「而」とサ系接続詞とが結びつき、「サリナガラ」（「乍而」）「サラヌダニ」（「不而」）などのサ系接続詞としての用法が生じたのであろう。

『曽我物語』・『神道集』・四部合戦状本『平家物語』の「而」字の用法は、時代・宗教的な流派による位相のみでは、その特異性を説明するのに十分でなく、ある特定の学問集団において成立したということに加えて、真名本であるという資料的性格にその使用の背景が存するのである。

注

（1）古辞書等の記述による。後述する。

（2）真名本には、大きく借音表記による本文と、変体漢文を志向したとみられる本文とに分かつことが出来る。前者の例としては『伊勢物語』、後者の例としては、ここに取り上げようとする『曽我物語』をあげることが出来る。本発表が対象にしようとするのは後者の類に属する真名本である。考察の対象とする時代については、資料に依っては原文（仮名本）の成立と真名本の成立に相当の幅が考えられるので、鎌倉時代から室町時代末までを考察の対象とする。

（3）熟字については、付訓による分類を行なっていない。尚、表中の片仮名は本文に付された墨仮名点、平仮名は朱ヲコト点であることを示す。

（4）中田祝夫・林義雄『字鏡集白河本　影印編』（勉誠社、昭和五二・七）

（5）鈴木博『妙本寺蔵永禄二年いろは字影印・解説・索引』（清文堂、昭四九・五）

（6）尚、妙本寺本『曽我物語』に於ける「然」字の訓についてであるが、同資料には「然」字が60例存し、その内助字として用

いられている用例は56例である。それら全てが無訓或いは部分付訓であり、サ系・シカ系の別を確認出来る用例は存しない。

(7) 使用した本文を、以下に記す。平安遺文（『CD-ROM版平安遺文』）、御堂関白記（『御堂関白記総索引』）、『九暦』『小右記』『殿暦』『岡屋関白記』『蔗軒日録』（以下東京大学史料編纂所編大日本古記録）、延慶本平家物語（『延慶本平家物語本文篇』『延慶本平家物語索引篇』）、応仁記（古典文庫『応仁記　付応仁別記』）、方丈記（『真字本方丈記　影印・注釈・研究』）、神道集（大岡山書店刊『神道集』）、湯山聯句抄（『湯山聯句抄本文と総索引』）、妙本寺本曽我物語（勉誠社刊『真名本曽我物語』）、大塔物語（『続群書類従第二十一輯下』）、四部合戦状本平家物語（斯道文庫影印叢刊『四部合戦状本平家物語』）、源平闘諍録（『源平闘諍録本文と研究』）

(8) 「遙堺」の意味を詳らかにしない。ここでは程度を示す語と解した。

(9) 神道集「而程」の用例は他に九例存する。

(10) 岩波古典文学大辞典には「真名本『曽我物語』・『私聚百因縁集』・『平家族伝抄』・『宝物集』第二種七巻本と共通する章句が多く、四部合戦状本『平家物語』とは、真名本『曽我物語』とともに、特殊な宛字が多く共通する事は、編者を考える要素となりうるが、それらの思想圏・言語圏は特定できない。」（村上学項目執筆、「神道集」の項）とある。

(11) 「然」字に対する全訓付訓例は「サテ」2例（100／5、110／6）、「サリトテ」1例（189／11）、「サラハ」（193／3）、「サハ」一例（206／11）それぞれ存する。

(12) 日本古典文学大系『今昔物語集』（山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注）によれば、「而ル程ニ」17例、「然ル程ニ」3例存する。

(13) 「而事」は古記録に若干見られるが、「而」字が「事」字に懸かる用例であるのか、或いは所謂助字であるのかは十分検討出来ていない。また、サ系であるかシカ系であるかも不詳である。今後の課題としたい。

(14) 作成に際しては、『日蓮宗事典』（日蓮宗事典刊行会編、昭和五六・一〇）等を参照した。

(15) 日蓮宗宗学全書刊行会、昭和三四・一〇

(16) 日興上人全集編纂委員会、興風談所、平成八・三

(17) 但し、名詞に係る用例としては日眼（〜至徳元（一三八四））の『五人所破抄見聞』に唯一例「而処」がみられる。

・而レハ聖人御弟子タル人ハ天台沙門ト不レ可レ言而処二五老僧天台沙門ト書事且ハ上行出世ヲ不レ弁且ハ別不嘱ヲ迷倒シ（五一六、四）

（18）『日蓮宗宗学全書』第八巻所収

（付記） 本稿は、平成十年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会及び平成十年度国語学会中国四国支部第四十四回大会に於いて発表した原稿に加筆したものである。両研究集会に於いて席上有益なご意見を賜った。衷心より御礼申し上げる。